<視察報告>

山神 裕

令和6年度神奈川県町村長行政調査に参加いたしましたので、以下の通り報告いたします。

◎日程： 令和6年11月13日(水)
◎主催： 神奈川県町村会
◎参加者： 神奈川県下13町村長、神奈川県町村会事務局職員3名
◎調査先： 千葉県流山市

◎調査概要
〇主に以下の3つのポイントに関して、同市総合政策部マーケティング課と子ども家庭部子ども家庭課よりご説明をいただき、質疑応答並びに意見交換を行いました。

流山市における
① 子育て支援の取組み状況について
② おおたかの森児童センターの運営状況について
③ 子育て支援とシティプロモーションによるまちづくりについて

〇流山市について
・千葉県北西部に位置し、人口約21万人、面積約35㎢の市。
・つくばエクスプレス（TX）の駅が3つある（流山おおたかの森駅、流山セントラルパーク駅、南流山駅）流山おおたかの森駅から秋葉原駅まで、30分弱（区間快速）。
・キャッチコピー「母になるなら、流山市。父になるなら、流山市」はあまりに有名。
・「都心から一番近い森のまち」もキャッチフレーズとして掲げる。

※ご説明いただいたことの概要は以下のとおりです。

〇人口推移（2・3ページ）
・つくばエクスプレス（以下“TX”）の開業前から、“共働きの子育て世代”をメインターゲットに、沿線開発に注力。

・2005年のTX開業以降、人口は着実に増加。2016年から2021年まで、人口増加率は全国792市の中でトップ。
・人口は2005年から2024年にかけて約6万人・約40%増加。今日もなお増加中。
・今年度、公立小学校が2校開校（合計19校に）

〇出生率・出生数（5ページ）

・合計特殊出生率は全国平均並びに千葉県平均を大きく上回っているが、2018年の1.67をピークに、低下傾向。

・出生数は同じく2018年にかけて増加の一途をたどり、2,120名を記録。その後、2,000～2,100人で推移の後、2023年に2,000人割れ。

〇社会増（6ページ）

・2015年以降、一貫して社会増（転入者数>転出者数）。年齢層別では、30～39歳が最多。

・直近2023年の社会増の人数は、2019年の4,444人から半減したものの、今年度も引き続き“社会増”は堅持。

〇SWOT分析（8ページ）

・井崎市長（2003年初当選。2023年6選）は就任直後に、市の課題や強みを経営的視点から捉える作業（SWOT分析=強み弱みの分析）を実施。全国で唯一の“マーケティング課”を設置。

・交通の利便性が高いことが魅力であること、知名度が低いことが弱みであることなどの分析結果を踏まえ、「都心から一番近い森の街」を目標イメージとして、子育て世代、特に共働きの子育て世帯の住民誘致策を展開した。

〇住みたい町としてのブランド化（10ページ）

・世田谷区二子玉川エリアを開発した東神開発(株)がおおたかの森エリアを開発。

・立地創造型エリア開発。商業施設を核としてエリアを開発し、人の流れを生み出し、顧客視点に立った施設運営を通じて、エリアでの滞在時間を長くし、街ににぎわいを創出する狙い。

〇住民調査（令和6年度。13・14ページ）

・子育てしやすい理由

① 保育所などの施設数が充実している 69.6%

② 公園などこどもの遊び場が多い 63.4%

③ 自然環境が良い 53.8%

④ 交通機関が便利 48.3%

・子育てしづらい理由
① 医療機関が少ない 60.6%
② 公園などこどもの遊び場が少ない 43.9%
③ 小中学校教育が心配 40.4%
④
・公園などこどもの遊び場が多く、故に子育てがしやすいと回答した人と、逆に少ないとし、故に子育てがしづらいと回答した人がいずれも多かった。
この結果に関して、市では、住んでいる場所によって、人口比で公園の数に差があり、非常に混んでいる公園があるため、との分析でした。

〇女性の就労支援（16ページ）
・「母になるなら、流山市」の戦略のひとつとして、女性の就労を支援。
① 女性向け創業スクールを開校（起業家の育成を目的とした市主導の事業）
② 物流センター内に保育所を整備（認可外保育所。外国人労働者も利用）

〇民間保育所を誘致（17ページ）
・保育所の数は、2010年から2024年にかけて、17園から104園に大幅増加。そのほとんどが公募による民間保育所の誘致。

〇駅前送迎保育ステーション（18ページ）
・流山市を一躍有名にしたのがこの事業（との理解です）。
・保護者の利便性向上＝負担軽減が主たる目的との理解でしたが、当初は、駅近の園に人気が集中し、満員となる一方で、駅から遠い園に空きが生じる不均衡是正を解消する目的があったとのことでした。

〇保育人材の確保（19ページ）
・市単独の事業として、保育士の処遇を改善（正規保育士に43,000円/月を支給。宿舎借り上げなども実施）
・地域手当が4%と、東京都（16%）との格差から人材確保に苦慮していたことに対する措置。

〇学童（20ページ）

・利用者数と学童クラブ単位数はグラフの通り、大幅増加。待機児童ゼロ。

・驚くべきは(?)、所管が教育委員会であること。学校との連携が上手く図られており、普通教室が共有されているとのことでした。

〇課題（24・25ページ）

・各種調査結果などを踏まえ、以下諸点を課題と認識。

① こどもの権利（自己肯定感の低さを問題視）

② こどもの居場所づくり（長期休暇中や放課後の居場所への需要強し）

③ 相談支援

④ 子育て支援（一時預かり施設などの充実が必要）

⑤ 幼児教育・保育の質の確保

⑥ 経済的支援（就学時の負担軽減を求める割合が最も高い。
給食費に関しては、第3子以降と年収360万円未満の世帯に対して、4,800円/月まで無償化）

⑦ ヤングケアラー

⑧ 地域でこどもを支える仕組みが必要

〇流山市こども計画（27～33ページ）

・前述の課題等を踏まえ、令和7年度からの5年間を対象期間とする「流山市こども計画」を策定。

・現行の“子ども・子育て支援事業計画”に、“子ども・若者育成支援計画”と“こどもの貧困の解消に向けた対策計画”を含めた一体的な計画。

◎感想

・これまで数多くの市町村を視察してきましたが、視察受け入れ側の話は大概、視察目的に沿って、成功事例に関する説明に終始するのが常でした。しかしながら、今回の流山市は異なっていました。

人口増加、特に子育て世代&こどもの増加に関するデータや要因の説明は当然あったものの、現在抱えている課題の詳細や対応策にも多くの時間が割かれ、こどもの権利に関する考えや今後取り組む予定の事業等に関する話もいただくことができました。

失礼な言い方になってしまいますが、本来は雲の上の自治体であるはずが、多くの課題を抱えていることを吐露され、少し身近に感じてしまいました。

・そう感じた所以は、職員の皆さんにも市長であられる井崎イズムが浸透している証左故なのかもしれません。

井崎市長は「1円まで活かす市政」を基本姿勢とされています。その姿勢が広報紙にも表れていました。月に3回も発行していることは驚きでしたが、さらに驚いたのはいまだに白黒だったことです（電子版はカラーとのことでした）。読んでもらってなんぼ、中身で勝負との方針でした。ぶれない市政運営、見習いたいです。

・参加者からの給食費無償化に関する質問に対して、前述の通り、“第3子以降と年収360万円未満の世帯に対して、4,800円/月まで無償化“との回答でしたが、市政（≒市長）の基本姿勢・考え方は以下の通りと補足されました。

“必要なところに必要な手当てを行う”
“バラマキによる社会増は続かない”

さらに、“（市の予算編成は毎年厳しいこともあるが）給食費の無償化は近隣で最後になると思う”との主旨の発言もありました。

僭越ながら、まったく同感であります。

（以上）